

さみだれ
五月雨の痕

ポツリポツリ。

降り始めた雨を耳にし、私は窓に向かって歩いて、頭を突き出した。今はまだただの小雨が降っているが、積乱雲が立ち込めて荒れそうな空模様だ。ただし、今日は特別な人の誕生日を祝うから、出かけないわけにはいかない。

毎回家を出る前に、私は持っていくべき物を確認するという習慣を身につけた。財布、携帯、鍵、カバンはオッケー。後は傘だけ残っている。玄関の傘立てから唯一の傘を取って、家を出て、傘を差した。このビニール傘は、黒猫の顔が描いてあるし、猫耳も付いているし、かなり可愛いから、男の私は雨の日に他人に変な目で見られることがよくある。実は、猫が特に好きなわけではない。傘はその特別な人からのプレゼントだった。

プレゼントというより、借り物であった。およそ二年前のある日、学校から帰ろうとしていた矢先に、にわか雨が降ってきた。忘れがちな私は傘はおろか、コートさえも持っていなかった。それで、私はひとまず校舎の軒下で雨宿りをして、どうすればいいか悩んでいた。雨が止むまで待つか。または、家まで走って帰るか。

私がまだ雨の様子を見て戸惑っていると、背後で声がした。

「あのう…」

「はっ、はい？」

私はちょっとびっくりして、くるりと振り返った。目の前に顔見知りのクラスメートの女の子が立っている。

「傘は持ってないんですか？」

と彼女は言った。

「はい、どこかに忘れてしまったようで…」

「そうですか。じゃ、よかったら、これを使いませんか？」

彼女はそう言うと黒い傘を差し出した。

「ええー、大丈夫ですよ。」

「いいですよ。雨は今夜止まないから。どうぞ。」

「い、いいんですか。」

「うん！」

彼女はうなずいて傘を私に手渡した。私が傘を差すと、傘についている猫耳がパッと突き出た。

「ごめんなさい、結構かわいいんだけど、いいかしら。」

と彼女は恥ずかしそうに小声で言った。

「いいんじゃないっすか。」

私は恥ずかしくないふりをしたが、頭が突然混乱した。彼女の名前は何だったっけ？同じ授業を取っているのに、知っているはずなのに…。さきさん？いいえ、

多分違う。なつきさん？間違っているだろう。なんだろう？さ、な、ええと、なにこさん？いや、それは名前ではない。やっぱり直接聞くしかない。

「ええと、悪いけど、お名前は？」

と、私は目を少し反らして尋ねた。

「^{さつき}早月です。」

惜しい…？

シトシト。

今でも早月との初めての会話をありありと覚えている。濡れた街路を歩きながら、私はぼんやりと傘を少し回したり、柄を握り締めては緩めたりした。この傘はもう二年あまりの間持っているし、雨の日に必ず携えて行くから、私の物と言えるかもしれない。かといって、傘を差すと、早月のことが私の考えに滑り込む。やっぱり早月の物だ。私はただ借りているだけだ。しかし、毎回返そうとするたびに、早月に断られる。

「いいよ、別に返す必要はないよ。そんなに高くなかったし。」

と早月は最初傘を返そうとした私に朗らかに言った。

「いや、借りた物をちゃんと返さないと…」

私はそう言ったが、自分の傘を全部無くしてしまったから、実際は少し返す気がしない。

早月は一瞬黙って、鋭い目で私の顔色を読み取ろうとするようにじっと見た。

「ふーん、他の傘は多分持ってないでしょう？」

と早月は私の本心を見通した。

「まあ、それはそうだけど…」

「えへへ、心配しないで。あたしは今要らないから、一応持ってたね。」

早月はにっこり笑った。

「…ありがとう。」

この瞬間に、私はその傘を持っていたいもう一つの理由があると悟った。

パラリパラリ。

めったに行かない場所に向かっているので、久しぶりに都心を通して、いつもよりのんびりした速度で周りを見回しながら歩いている。普通都心は賑やかだが、今日は異常に落ち着いていた。昨日の天気予報によると、今日は嵐が吹くかもしれないから、外に出ている人は少ないだろう。それにしても、最低でも数人はどこかからどこかへ街を歩くはずではないか。しかし、今まで一人たりとも通り過ぎていかなかった。いささか寂しそうな街中だ。

街路を横切ると、灰色の空気にくっきり浮き出て明るい建物が現れた。その建物に近づくと、早月をファーストデートに連れ出したおしゃれなカフェだと気付いた。私はカフェの前で立ち止まって、窓から中を覗き込んだ。

昼食の時間はもう過ぎたのに、カフェは案外混雑していた。外にいる私でも中からのがやがや声が聞こえる。その人々は雨や憂鬱な天気を避けるため、ここで雨宿りをして、暖かいコーヒーやお茶を飲んで、しばらく気楽にしているらしい。私は窓という透明な仕切りを手で触れて、早月との恥ずかしい思い出を思い浮かべた。

「別々にしようか？」

「いいよ。僕が払っとう。」

「いいの？」

「うん」

と私は激しくうなずいた。早月は私をかなり助けてくれたので、勘定を払うのは私にできるせめてものことだ。

「…3470 円です。」

と言われて、私は財布を出そうとしたが、スラックスの右のポケットが空っぽだった。左のも空っぽ。後ろのポケット、上着、衣服の隅々まで探しても財布が見つからない。

「いいよ、あたしに任せて！」

と、早月は私の慌てている姿を見て、勢いよく口にした。私は恥ずかしくて何も言えず、燃えるように真っ赤な顔を隠すため、顔を伏せて後ずさりした。早月は前に一歩足を出して、手提げから財布を出した。

バカな私は確かに悪い印象を与えた……信じられないほどの大失敗だ……

カフェを出た時、私はやっともごもごと声を出した。

「申し訳ない……僕がおごるって言ったのに……」

「心配しないでよ。」

早月の声は怒りを全く含んでいないから、私の恥ずかしさはすぐになくなっていった。

「困った時は、早月が救います！」

と、早月は元気に胸を張って、拳を突き上げた。そのポーズを取って生き生きとした早月を見て、私は心が思わず暖かくなってしまった。このように早月に頼りすぎるべきではないが、なぜか抱かれたように早月のぬくもりを感じた。

ショボショボ。

今立っているカフェの窓の前に、二年前にそう考えた。私はまた歩き始めて、その時を振り返った。今でもそうだろう。冷たい梅雨の中にいるのに、早月の傘をさしたら、ちっとも寒くない。

今日は早月の誕生日だから、プレゼントをもう用意した。それに早月が好きな花を添えたかったから、待ち合わせ場所に着く前に花屋に寄った。早月の好みの花は……

「お誕生日おめでとう！」

と私は去年早月に言った。

「ありがとう！」

「では、プレゼントをどうぞ。」

と、私は背後に隠したプレゼントの箱を、はじけるような笑顔を満面に浮かべた早月に渡した。

「開けてもいいかな？」

「どうぞ！」

早月はわくわくしていたが、同時に慎重にラッピングを解いた。そして、スカーフを箱から引っ張り出した。

「覚えてたの！分厚いのが欲しかったんだ！」

と早月は言って、デザインが良く見えるようにスカーフを少し上げて垂らした。

「バラの模様？」

と早月は聞いた。

「そう。」

私はそう答えた途端に、微笑んでいた早月が一瞬眉をひそめたかと思った。気のせいかな。

「バラか。ありがとう。」

と早月は笑顔のまま言った。微妙な変化だが、気分が前よりほんのわずかに悪くなったようだ。

「何か気に障ることある？」

「ふーん、気づいたか？」

と早月は自己満足に目を輝かせて笑った。顔を読むのは早月から習った能力だからだと、私は考えた。

「そうね。実はさ、バラってあんまり好きじゃないんだよね。」

「花が好きじゃないんだ？」

「いや、そういうわけじゃないよ。ただ好き嫌いあるから。」

「で、どんな花が好き？」

「ええとね。白いのが好きかな。百合とか菊とか……」

「へえっ！縁起が悪いじゃん。葬式で供える花じゃないか。」

「そうね…そんな花が好きっていうのは変かしら？」

「まあ、変じゃないよ。十人十色だね。じゃあ、スカーフはどうする？気に入らなかったら、返品でもいいよ。」

「いいよ。あなたのプレゼントだから、大切にしますよ！バラもバラなりの魅力があるかもね。」

と早月は言って、スカーフを首に巻いた。

「あったか〜い！高かったでしょう？」

「ええと、それは秘密だよ！」

この日から、早月は寒い日に必ずそのバラのスカーフをかぶって出かける。私は、早月のくれた傘に入る。早月は、私のあげたスカーフにまとわれる。そんな風に、どんなに離れていても、お互いに守り合っている。

パラパラ。

私は花屋を見て回って、白い百合を一輪、白い菊を一輪選んで、カウンターまで持って行った。早月のために花を買うたびに、花屋さんにいつも哀れむような目で見られるから、そんな顔つきにすでに慣れた。だから、今回も花屋さんの何かを言わんばかりの顔も気にならないはずだった。

しかし、今回は涙を抑えながら花を買った。それから、私は花屋を出て、傘を差して、再び歩き出した。

決して忘れない日であった。その朝、私はいつも通り早月のアパートまで行って、それから一緒に学校へ行った。殊にひどい雨の日なので、二人は濡れないように傘の下で寄り添って歩いた。

ある交差点を横断しているところで、誰かが早月の肩にドンと当たった。交差点を渡った後で、早月は首に触れた。

「あら、スカーフ。」

「落ちた？」

「うん、落ちたかも。」

後ろを振り向くと、スカーフが地面にあった。

「あっ、あっちだ。」

と、私は雨粒に打たれて寂しそうなスカーフを指差した。

「ちょっと待って！」

早月は傘の下から滑り出て、スカーフに向かって走った。その瞬間に、私の視野の端から巨大な影が現れた。私は早月に声をかける時間もない。

ザーザー。

その日からもう6ヶ月が経った。その日から頭がずっと雲でかすんで、雨も止んでいない。その日からこの傘の下でしか慰めを見いだせない。

私は傘をしっかり握りしめながら、ぬかるんだ坂道を上がった。早月が丘の上で待っている。墓地に着いたら、手桶と柄杓を借りて、墓地を横切った。

ようやく早月の墓に到着した。私は墓を洗い清めて、百合と菊を捧げた。そして、火が消えないように傘をさしたまま、ろうそくと線香をカバンから出して、火をつけて捧げた。傘の下で、このわずかな暖かさはまるで早月のぬくもりのようである。この暖かいバブルの中にもう少し居させて……

夢中になる寸前のところで、私はパッと傘をすぼめた。すると、ろうそくの火が消えて、線香も消えた。雨の中に立ち、肌が雨に打たれる感覚を久しぶりに得た。冷たいな。私はひざまずいて、傘を横にして墓に置いて、合掌した。

「早月ちゃん、お誕生日だね。今日はようやく傘を返すよ。ずっと貸してくれてありがとうね。」

と私は祈る。雨がにじんで濡れていく。

「天国で安らかにいてね。これから僕はこの地球を自分で歩んでみる。また会おうね、早月。」

私は立ち上がった。立ち止まっている間に、雨がだんだん強くなった。それぞれの雫は肌に痕を残すように刻んでいく。しかし、雨の一定のリズムを聞いて、雨が体の底に至るまでしみて、何となくほんの少し暖かく感じる。

五月雨の後、五月晴れがいつか来るだろう。